《復刻版》

昭和五十九年一月

関東大震災の思い出文集

満六十周年に当って

須影公民館

昭和五十九年、須影公民館は、関東大震災満六十年に当たり、その時の生生しい体験について、地区民の皆様からご寄稿頂き、まとめたのが、「関東大震災の思い出文集」である。

作成されたことは、記録に残っていたが、実物の存在が分からず、アンテナを伸ばし探索していたところ、井泉のある人が持っていることを知り、早速、お借りしてきました。

この小冊子は、その原本（ガリ版刷りＢ５判）をパソコンで打ち直すとともに、編集し直して「復刻版」として再発行したものです。

編集にあたっては、内容に不適切な用語が使用されておりますが、原文の意思を尊重し、誤字脱字のみの修正でとどめました。

貴重な資料です。今後の参考にしていただければ幸いです。

平成二十九年八月

羽生今むかし探究会　　間仁田　勝

序

毎年九月一日は、関東大震災の記念日として、各地に防災行事が行われて来ましたが、今五十八年のこの日は、大正十二年から数えて、満六十年の記念日に当たり、一段と力をこめての行事が行われました。

六十年の星霜を経て今や、東京を中心にして家屋全半壊二十五万戸、死者、行方不明十四万人を数え、焼失四万五千戸の悲惨極まる大災害。当地域にても倒壊こそ少なかったが足の踏み場も定まらず仰天戦慄させた大地震を知る者も、極く限られた数になりました。

この、還暦の時を機として、この未曾有の大地震を身をもって体験されたありのままの記録、また、更にそのような場合、如何に処したらよいかの教訓をも加えて、子、孫、広く後人に伝えることは、地震国日本に生きる私達にとって、まことに必要な、むしろ義務と言ってよい事かも知れません。そのような意味から、広く体験記をお願い致しましたところ、多数の方から玉稿を頂戴致しました。記憶をたどりながら生々しく当時を彷彿させる数々の記録、誠に有難くここに謹んで御礼を申し上げます。

茲にこれを収録して広く地域の皆様方の閲読に供するものであります。

備えあれば憂いなし、先輩の体験を生かして、万一の際の心構えとなされんことを切望致しま

す。

ここに重ねて玉稿を賜りました各位に心から感謝を捧げる次第であります。

目　次

一　関東大震災の思い出と教訓　下川崎　藤倉　栄一郎・・・・5頁
二　東京大震災の思い出　下川崎　小室　類次・・・・8頁
三　地震恐怖症　須影　小磯　幸蔵・・・・10頁
四　関東大震災を顧みて　加羽ヶ崎　山岸　忠治・・・・12頁
五　地震の思い出　秀安　北島　なか・・・・13頁
六　大正大震災の思い出　上川崎　石野　織三・・・・14頁
七　関東大震災に思う　秀安　島村　勇一・・・・16頁
八　関東大震災の思い出　下川崎　田中　徳一・・・・18頁
九　幼時の記憶　砂山　関口　榮次郎・・・・20頁
十　関東大震災の思い出　加羽ヶ崎　斉藤　正之・・・・22頁
十一　関東大震災の思い出　砂山　小林　浜次・・・・23頁
十二　関東大震災の思い出　砂山　石井　義雄・・・・25頁
十三　関東大震災の教訓　下羽生　出井　治人・・・・27頁
十四　私の地震の思い出　上川崎　牧田　壮平・・・・29頁

十五　私の思い出　砂　山　奥野　要助　・・・３１頁
十六　私の思い出　下羽生　蓮見　英一　・・・３３頁
十七　関東大震災と私　砂　山　関口　啓助　・・・３６頁

関東大震災の思い出と教訓

下川崎　藤倉　栄一郎

大正十二年九月一日といえば二百十日に当たり、東京より遅れて正午過ぎに突然激震に襲われた。江戸時代安政年間にもあって、丁度六十年目に当たる。

今年はやって来はしないかとびくびくしている今日であるが、秋田沖の大地震が代ってくれたようである。

私は私立埼玉中学が県立不動岡中学に昇格したばかりで古い校舎でお昼の弁当を食べ終わった時に、歩くたびに床がゆれる老朽校舎だったので悪友がいたずらにゆすっているのだろうと思っている内に、壁土が落ちはじめ、屋根の瓦がガラガラドッシーンと落ちてきたので、とび出した。校舎はつぶれなかったが、東隣の農家の母屋がぺしゃんこにつぶれ幼児が埋まってしまったといわれて、大勢して屋根瓦をはがし、壁土を手で掘り出し、泥まみれの幼児を救い出すことができた。幼児は無傷だった。校長は生徒を集めて直ちに帰宅するよう指令した。

帰宅してみると自分の家屋は無事だったが、東隣の長屋がぺしゃんこにつぶされていた。

つぶされた家を調べてみると道筋があって一列につながっていた。

祖母は病弱で母屋に寝ていたが、南廊下まではい出したもののショックで腰を抜かした模様、これが原因となったらしく三ヶ月後に病没されてしまった。

一日の夕方、東京方面に入道雲があらわれ、真赤にやけて、広範囲が明るく、当地で堤灯なし

で夜道が歩けた。今日のようにラジオやテレビがなかったので、電信、電話、汽車が不通で、皆目、様子がわからず不安な日が続いた。二日間、三日間と夜は赤々と照らされていた。

その内に東京方面の被害者達が線路づたいに歩いて来はじめ、流言と語がとんで朝鮮人が暴徒となって攻めてくると言いふらされ、各戸木刀、槍、刀など先祖伝来の武器を持ち出し、村々で自警団を組織して、ものものしい警備に当たった。暑かったので白い洋服を着た医師が朝鮮人とみなされ、ひどい目にあって、命からがら逃げ帰ったという例もあった。

あんな大地震ではあったが、全然、前触れがなかったわけではなかった。半年前の三月には強震があって所々で壁土が落ちていた。

九月には余震が強烈に何回もやって来た。風が吹かないのに大木が大きくゆれて、ごうごうと音をたてて来たり、稲や大豆が波打って移動して来たので、又やって来たぞと用心した。

幸い農家は食糧や水に困らなかったが焼野が原になった都会は無残だった。

騒動が起こりそうだったので、各所に軍隊が出動したり、飛行機が飛んできて、安心するように伝単をまいたりされたのでようやく人々が落ち着いた。

物価が暴騰したので、政府は暴利取締役令を公布して取締りに当たり、世界各国からの援助もあって落ち着きを取り戻した。

地震がやってくると、必ずものすごい雨が降る。本当に泣き面に蜂であった。

私は昭和十八年九月十日、二百廿日に鳥取大地震に見舞われたが、奇跡的に無事だったが、参考のための教訓として次のようなことを思い出した。

家を飛び出す時には頭に落下物が当たっても大丈夫なように厚い座布団のようなものをかぶること。

出られなかった場合には机の下と置物の間にふせること。

命あっての物種といわれているとおり持物に未練が合ってはならない。鳥取大地震の際、女学生が多数やられたが、下駄や物を取りに寄宿舎へ入ってつぶされてしまった。中学生は一早く逃げ出して一人も死ななかった。

金銭に不自由するので何時でも若干用意しておくこと。法令で引き出せるようになるまでにはなかなか日数がかかるからである。

トタン板とかビニールハウスがあれば大いに役立つし、炊事道具や救急用品を普段から用意しておくこと。

電気や水道が止まっても困らない方策を考えておくこと。電池で聞けるトランジスターラジオは必ず用意しておくこと等いろいろあるが、何といっても隣近所お互いに助け合って災害をのりきる覚悟があってほしい。核家族が多く隣近所のつきあいをあまりやらない今日、特に強調しておきたい。

東京大震災の思い出

下川崎　小室　類次

其の日は、晴天にて良い日よりだった。不動岡の高野染物屋で仕事をしていて、いますこしでお昼になるところで、グラグラと大きな地震がしたので、びっくりして外にとび出したが、立ってはいられなかった。

その時、東にあたる片倉製糸会社の大きな煉瓦作りの煙突が二回にわたってくずれ落ちたのを目の前にみて、これは大きな地震だと驚いた。

そして会の川の水が向う岸にうち上げ、又こちら岸にもどり川の底が見えるほど水が両岸にかわるがわるうち上げられて、これにも驚いた。

みんなでよく家が倒れなかったと胸をなでおろした。

そうして自分の家が心配になり、行ってみようと裏の長屋に自転車を取りに行った時、又二回目のゆれが来て、長屋の柱が倒れそうに左右に大きくまがり、自分は立って歩けず、つぐんでしまい恐る恐るしずまるのを待って、ようやくしずまったので自転車に乗って家に帰っていったところ、別所までくると、道ばたの大きな草屋根の家がつぶれてしまっていたのを見て、非常に恐ろしく気の毒な家だと思った。

自分の家はどうなのかなと志多見の十文字まで来たが、つぶれた家は一軒だけだった。家まで来たらつぶれなかったのでほっと安心したので、どっと疲れが出た。

そうしてみんなで無事を喜び、地震の大きさに驚いて、又余震がくると言うので、落ち着いていられなかった。

今夜は竹やぶの中に寝るとか言って余震がくるのを心配していた。

そうして夕方、うすぐらくなると南の方の空が真っ赤になったので、騎西が火事だと思い、志多見の十文字の高山まで、駆け足で行って見た所、真っ赤なのは東京だけだと言う。みんながよって来て驚いて、東京では大変だと心痛の思いをしたことを、思い出しては恐ろしくなるのであります。

そして昨今三宅島の噴火がおこり、島民の方々には、地震と同様に非常にお気の毒で、すこしでも慰問の手をのばすべきと思います。

地震恐怖症

須影　小磯　幸蔵

どんな理由だったか、九月一日午前十一時五十八分、すでに弁当は食べ終わった教室で休み時間を楽しんで居た不動岡中学二年の時である。

長い暑中休暇が終わって第二学期に入っても別に始業式もなく、普通の授業だった。

校舎は一番西側で南、ゆれ出した時は地震と一緒になって体を動かしていた所が、突然大きな震度になったので、さすがの腕白少年達もめん喰って外へ飛び出した。

所でその校舎の南は民家であった。その家の垣根と校舎との間は四間位だったと記憶している。古い校舎はつぶれると予感したので、その垣根を越えて校舎から少しでもはなれようと必死であった。あわてているからなかなか突破出来ない。あれよあれよと揺れる校舎を見ながらとうとうその垣根は越せなかった。

地震が静まって、あらためて校舎を見たらやはり倒れなかった。

東の校舎近くの民家は倒れたので、中の人を助ける為に五年生の先輩が救出作業に精出した。

いつもよく見えた東方の製糸工場の煙突は消えてなかった。

校舎のことはそれ以外記憶にない。

家へ帰っても余震が多いので少しでも揺れると、戸外へ飛び出すように神経過敏になっていた。

夜になって兄が（昭和十四年三月一日戦病死）青年団関係で、羽生駅で見張りして、東京から

来る列車の車体裏まで点検して、朝鮮人が乗っているかどうかを調べたらしかった。東京の火災は朝鮮人の放火と言う流言飛語に依るものであったらしい。考えてみると夏休み中によく見た鮮人のあめ売りの姿がすっかり見られなくなった。

兎に角、私は地震が非常に怖いと思うようになった。

ちなみに三俣地区（現在の高校）へ新築中の校舎は柱だけが立ったままだった。私立から県立へ移管されて三年目である。時の校長は肥留川鷲雄先生、教頭は狩野益三先生であった。

関東大震災を顧みて

加羽ヶ崎　山岸　忠治

ふり返ってみますと、大正十二年九月一日、もう六十年前のこととなりました。

学校の夏休みが終わった翌日、二学期の始業式を終え家に帰ったその時、庭先の草木がわさわさと揺れ、地面がもくもくとして、立っていられないような大きな地震がありました。

そして何回となく間隔をおいて繰り返して続き、夜になって、ふと南東の空を見ると赤く明るくなっているので、一体何だろうと思いました。後で話を聞いたのですが、地震のあった時が丁度昼時であったので、東京ではお昼の支度をするその火が倒れた家に燃え広がる、こうした倒壊火災が都内一帯各所に起こり、火の海となって、三昼夜位燃え続いて、その下敷きとなった人は、火と煙にまかれて、逃げるに逃げられず、数多くの人が焼け死んだ。その凄惨な有様は、言語に絶することであったと聞いておりました。

なお一方に於いて、朝鮮人が徒らをしているとのことで、人心もいら立ち、鮮人であれば殺傷するというようなこともあって、震災が鎮まった後は焼野と化し、その残骸或は死人の片付け等で大混乱であったとのことでした。

そして当時、裏を通る汽車を見ると見舞いに行く人、焼け出されて田舎へ疎開する人等、その他東京方面に往復する人が中に入りきれないで、屋根の上まで人だかって一杯でした。こうしたことが一週間位続いたでしょうか、平常の時は考えられない情景であったことを記憶しています。

地震の思い出

秀安　北島　かな

大正十二年の地震の時は、私は十七才でした。

あれからもう六十年とは夢の様に過ぎてしまいました。

地震の時は十二時四十分位だったと思われますが、丁度昼休みで居られたので、急にあの大きな地震がきたので外にも出る事も出来ず、歩く事さえ出来ないほどの激しさ、見るみるうちにお勝手の壁は落ちるし井戸の水は濁るし、裏の堀の水は道に上るし、どの位大きな地震か、想像もつかない位の事で永久に忘れられる事では有りません。

大正大地震災の思い出

上川崎　石野　織三

大正十二年九月一日、この日は思い出してもぞっとする大正大震災の日でした。

その当時はお昼を知らせるサイレンは無く、下新郷の大光院で十一時半頃、梵鐘をつく丈だったので、それを目安に昼食に来たのです。

其の年に限り、晩秋蚕を早く掃いたので、妻と二人で桑を摘みに行って居りました。桑摘み篭を背負うのと同時にあの大地震です。篭を背負ったまま倒れて仕舞いました。

周りを見ると樹木は大嵐の時の様にゆれ、家屋は波打って居りました。

蚕棚が倒れはしないかと気になるので急いで家に帰りました。棚は大丈夫でしたが相つぐ余震に家も棚もゆれどうしでした。

夕刻、日が暮れるに従って、東京方面は真赤になりました。ある人は東京が火事になったのだ、又ある人は大島が噴火したのだと意見はまちまちでした。

不安のうち一夜を過ごしました。ラジオテレビが有るわけではなし、電話はなし、知るすべが無かったのです。

九月二日になり東京が火災である事が判りました。

新聞は来ず細かい事は判りませんでしたが、其の内、不逞鮮人の仕業だと云うデマが飛び、午后は日本刀棍棒等を持ち、字内の要所要所の警備につきました。お巡りさんが巡視に来て「御苦

労様です。」と言って立ち去ったのは、今に思えば皮肉でした。

九月三日東京の罹災者が引き上げて来るので、其の接待のため、羽生駅に行きました。

接待が任務なのですが、其れと同時に不逞鮮人を見つけるのも一役だったのです。

列車が着くたびに内外（列車が混むので屋上に迄お客が乗って居ました）を見て歩きました。

頭髪をオールバックに刈り開襟のシャツを着て居た人が鮮人に疑われました。

今度の三宅島の噴火にせよ、大正大震災にせよ、再びこうした天災の来ない事をお祈りします。

関東大震災に思う

秀安　島村　勇一

大正十二年九月一日、大地震が起こり、関東地方が大災害を受けました。庭に立って居られませんでした。

東京は大火災になり、人は逃げ場を失い、沢山の人が焼死しました。

東京の親類の者が命からがら逃げてきました。

外にも親類がありましたので、翌日、東京へ行きました。行く道で、戸田あたりは地割れがして、粘土が吹き出て居りました。浅草や本所が大火災で、逃げ場のない人が隅田川に飛び込んで、沢山の人が死にました。上野公園に避難した人が無数に居り、行方不明の人をさがす尋ね人札を持った人があちこちに居りました。喰うに食なく、住むに家なく、行くところなく、夜は野宿のあわれな情景でした。

人心は荒廃し流言飛語により、治安は乱れ悲惨な世想でした。

大震災の時、朝鮮人が火をつけたと言う流語が流れ、彼等はひどい目にあったのです。

そこで彼等は警察に助けを求めたのです。警察では彼等を東京に置いては大変な事になると思い、東京を離れるしかないと思い、大勢の朝鮮人を中仙道を通り、熊谷を経て神保原に来た時、群集が飛び出し、朝鮮人を殺した事件がありました。

当時、秀安に蛭間〇〇〇と言う人が居りました。背が高く六尺近い人でした。常に白い服を着

て居りました。
たまたま羽生駅に行った時に朝鮮人と間違われ、ひどい目にあいましたが、秀安の人だとわかり、難を逃れたのでした。
誠に不安な世相でした。

関東大震災の思い出

下川崎　田中　徳一

大正十二年九月一日午前十一時五十八分関東大震災、今から六十年前の暑かったけど静かなよいお天気でした。勿論時刻は後で聞いたのでした。

グラグラと来たので、外へ逃げようとしたのですが、当時三～四才の弟がそばに居たので逃げることも出来ず、そのまま、居づくまって弟を抱きしめて、じっとして居た時間の長かったこと。私はその年の春、村立高等小学校を卒業し、家業の手伝いを初めた年令ですから、弟を護るのが精一杯と言うことだったかも知れません。やがて鎮まったので外へ出たのでしたが、瓦は一枚も落ちず心配した煙突（高さ四十尺）も倒れては居りませんでした。家族も全部無事、近所の家も一棟も倒れては居ず、負傷者も一人もありませんのでやっと安心致しました。

やっと鎮まったので、昼食にしようとしたら、井戸端の棚にあるしょうぎ（竹で編んだ直径一尺五寸位、深さ一寸五分位の竹細工）は三尺もはなれた處に天地逆さまに地面に落ちておりました。幸い布きんがそっくり下にあったので、土は付かずに食べられたので、ああよかったと思いました。当時、昼うどんは御馳走と云う程のものではありませんでしたが、八月一日、月おくれの節句とか云われたのを思い浮かべます。

余震が激しかったので、昼も夜も食事は外で、二～三日は戸外へ寝たと記憶して居ります。

東京では陸軍被服廠跡で数万の死者が出たとか、暴動が起きたとか、真偽入混った情報が流れ、

流言飛語がしきりに伝えられ、不安におののきました。その中にも暴動の流言で、その犠牲になられた方もあったと聞いて居ります。天変地変には流言は付きものの様ですが厳に心すべきことと思います。

あの当時は、自動車も今とは比較にならない程少なかったのですが、今は自動車が多過ぎて、混乱被害が増幅されなければ良いかと心配して居ります。

東京の混乱被害は言語に絶し、遷都の話しもあった様でした。天皇陛下の「遷都はない」と云う意味のお言葉があったことを思い出します。

当時、唱われた歌に復興節と云うのがありました。其の一節を次に。

♪　騒ぎの最中に生まれた子供　つけた名前が震太郎アラマ　オヤマ
震地に、震作、シン子、復子、その子が大きくなリヤ、
地震も話の種、エーゾエーゾ、帝都復興エーゾエーゾ　♪

遠い記憶を思い出して記しました。

四十尺の高い煙突が倒れなかったのは、今考えると不思議な位のことと思われます。一本長い接目のない杉の木を地中に立て、二尺の土管を積んで継いだものを其の木へ針金で縛りつけ、トラ綱を四方へ三段に張ったものでしたが、今考えると、あんな原始的な工法のものが良く助かったと思います。

幼時の記憶

砂山　関口　榮次郎

私の誕生日は奇しくも大正八年一月一日である。従って関東大地震のあった十二年九月一日はそれから丸々四年八ヶ月後になる。以下はその幼時の記憶である。

当日、子守を加えて家族七名で昼食中だった。父が不審な表情で表をみていたがやがて「地震だ！！」と叫び、皆が一斉に裏口から竹藪へ避難した。二才だった弟は母がつれて行ったが、私は一人残った。がたがたと家が揺れていたが恐怖感はなく悠々と南瓜の煮付けで飯を食っていた記憶がある。そこへ父が飛込んで来て、私を抱えて竹藪へ行った。

すぐ東に物置があったが、父はその揺れをみて危ない危ないと叫んでいた。その内、母屋の中で大きな音がした。上りはなの上にあった戸板位の棚が落ちたのが裏口からわかった。やがて、静かになり父は私を抱えて母屋の西側を通って木小屋の方へ行った。母屋と木小屋の間に大きなビワの木があったが、そこへ来た時、父は急に膝をついてしまった。又大きな揺れが来たのだった。地震に関することは以上である。

隣近所でも家が倒れたとか、損害を受けた話は聞かなかった様に思う。

夕方になると東南の空が一面に薄赤くなってきた。どこかが火事だと皆言っていた。中学生の叔父が樫の木に登ったが、どこだかわからないと言いながら下りてきた。

長ずるに及んで、如何に大変なことであったかがわかってきた。東京では地震による損害は

微々たるものであったが、数十か所から起こった火災の為一面が焼野原と化し、逃げまどう数万に人命が失われたと言う。

「ぐらりときたら先づ火元を断つ」この心掛けが大切である。

関東大震災の思い出

加羽ケ崎　斉藤　正之

私共郷土の歴史研究受講者達が、公民館長さんの呼びかけに依り、関東大震災（大正１２・９・１）の当時の記憶を思い出して、一つの文集を作ろうじゃないかと云う事になり、私達が見たり聞いたりした事を一寸書いて見たいと思います。

此の日の地震は、お昼前後かと思われますが、相当震度の高い地震であり、棚の上の物は落ちる。台所にあった餅つき臼は轉がり出る。其の内、土蔵納屋等の瓦は恐ろしい物音を出して崩れ落ちると、云う様な有様だったようでした。夕方まで強い地震はちょくちょく続きました。

私も小学校五年生位であったかと思います。母が夕方、前の畑で晩秋蚕の桑摘みだったので、其のあとに付いて行って居りました時にも、また大きな地震がありまして、立って居る事も出来ず、住家の方は大きく左右にゆれ、ぶつかるのかなーと思う程でした。其の日は庭に幾つかの縁台を持ち出して假寝をした様な気がいたします。

南の空は真赤でした。次の日も次の日も真赤でした。東京が燃えて居たのでした。幾日位燃え続けたのでしょう、おそらく一週間位燃え続けたのでしょうか。また当時叛逆者達の暴動等もあって隣近所の人達がそれぞれ竹槍等を持って夜警も厳重にやった様でした。東武鉄道の近くなので、下り線の汽車には屋根の上迄身のまわり品を持った避難者があふれ出ている状態が今だに思い出されて参ります。

関東大震災の思い出

砂山　小林　浜次

「ぐらぐら」突然ゆれた。地震だ。昼食をたべかけ、裏口へ飛びだす。露天に有った木製の風呂桶の水がゆれて外へはね出す。竹やぶにしゃがみ、家の屋根を眺めて、只、うつろの気持ちでしばらく失神した様な時が過ぎた。

近所の人達の聲がする。「道路や畑に亀裂がしたと」、行って見ると各所に有る。

幸い村で火災もなく家屋の倒れを聴かなかった。

日が落ちて暗くなるにつれて東南の方が夕焼けの如く赤く次第に紅の色が濃くなる。

流言が「東京が丸焼だ」、「朝鮮人が井戸へ毒をなげ入れる」等。

村役場からの指令だったか、各戸から字の出入口を警戒させよと、かり出され、手に手に竹槍、日本刀を持って終夜警戒、人々の心は殺気立って居た。

浅草千束町に姉が嫁して居た。安否を気づかい、父の言に依り食糧、食器、衣類等を荷車に積み、従兄の大沢五郎氏と共に中仙道を東京へわらじばきで向かった。大宮、浦和を過ぎる頃、焼け出された人等が、布団を背負い、わずかの荷物をさげて、親類、知人等の所へ疎開するらしい其の数が次第に増す。戸田橋を渡り東京へ、都心に近くなるにつれて焼け野原、尚、煙立ち上る変わりはてた道路を浅草へ、姉の家は幸運に焼け残り、避難先から帰ったばかりだった。

当時、自動車の数、東京に千余台と云われた。現在、あのような地震が起きたら停電に依る信

号不能、車の波、吾先に逃げる人等、加えてガソリンに引火爆発したらと思うとおそろしくなる。
大正十二年震災当時、米一俵が十円四十銭だった。翌十三年には十五円三十銭に値上がりした。
六十年の歳月は身を以って体験した人々は少なくなった。
災害の起こらない事を祈るのみ。

関東大震災の思い出

砂山　石井　義雄

人々を大混乱に陥れた、あの関東大震災が起こったのは、今から六十年前の九月一日、朝からカンカンと陽の照りつける暑い日だった。

私は、尋常小学校の五年生であり、近所の一年生だった（関口）竹之助君と、裏の手子堀の橋の上で、午前十一時頃から、魚釣りを楽しんで居た。石橋の上は焼けるように熱く、とても跣足で居る事等は、出来ない。バケツで川の水を汲んで、橋の上に撒くと、ひんやりとしてなんとも居心地よかった。

六十年経た今でも兄弟の様な気のする竹之助君と二人で釣りをして居た。川の水は、土手を越さんばかりの満水であり、約一米位在る水深も、川の底まで清く透き通って見え、魚の群れが川上に泳いでいくのが今でも目に浮かぶ。

突然、「ヅヅー・ゴゴー」と云う、無気味な音と共に、もっくりと、地面一帯が、上下左右、不規則に揺さ振られ、それが二分以上も続いた、と云う事を記憶して居る。とても座って居られないので、橋の中央に這いつくばって、様子を見て居ると、川も水が左右に打ち上げられ、見る間に、一米も在った水深が三十糎位になってしまった。

「でっかい地震だったなあ。」と、つぶやきながら家に帰ると、祖母が「こんな大きい地震は生まれて初めてだった。」と言った。家の者は皆、裏の竹山に避難したのだそうだ。

其の後、余震が、毎日五～六回、三・四日続いたと思う。
太陽が西山に沈み、やがて、赤い夕焼け雲も色失せて、辺りに夕闇が迫る頃、南東より南西に至る空が真っ赤に染まった。私には、それが何だか無気味に思えた。
翌日になって、東京が大火災だとの報に接し、体が震える程、驚いた。それから、三日三晩、東京の空は赤く燃えていた。その時に、朝鮮人が、ガソリン入りのサイダー瓶を東京に撒き散らし、あの様な大火災を越したとか、農家の井戸に毒を入れるとか云う話が伝わった。その結果、消防団員が全員出勤し各道路の要所要所に日本刀、槍、竹槍を持ち、物々しい警戒に当たり、朝鮮人を殺害する事となった。
後日、流言飛語と判り、多くの犠牲者を出した。この出来事は今日でも国際問題の一つとされている様だ。
流語飛語は、恐ろしい出来事を引き起こす。誠に以って痛ましい事である。
あの大地震に依り、東京では十万余人と云う死者を出した。
「我々人間の力では、どうする事も出来ないのだろうか。」と子供心に胸を痛めたものだった。
昔から、『喉元過ぎれば熱さを忘れる』と云う諺が有るが、この出来事を後の世に伝え、決して忘れる事なく、いつ、いかなる時でも、又、国家有事の場合でも冷静沈着、諸事に万全を尽くし、正しく、然かも、俊敏果敢に事に当たる勇気と胆力が必要だと思う。

関東大震災の教訓

下羽生　出井　治人

今から六十年前、大正十二年九月一日、午前十一時五十八分、マグニチュード七・九の大地震が関東一円を襲った。

その時、私は、県立不動岡中学校（現在の県立不動岡高校の前身）の三年生であった。当時の学校の所在地は、現在と異なり、不動尊より、五百米位西方にあった。校舎は、古い平屋建のものが、十米位の間をおいて、二棟並列してあった。当日は、丁度、第二学期の始業日で、全校の生徒が学校におった。その時は、すでに休憩時間で、生徒達は、いつもの通りワイワイ騒いでおった。そのうちに、急に教室が揺れ出し、アット云う間に壁に掲っておった黒板が落ちて仕舞った。それ迄は、建物がガタガタしていたが、まさか地震とは思わなかった。元々、新校舎建て替え前のボロ校舎で西側から支柱でささえて居たような老朽さだったので、元気のいい生徒達が教室で騒いでいれば、建物が軋む位は当たり前の事であった。ところが黒板が落ちたので、これは只事ではないと云う思いが、一瞬、誰の心中にも走って、皆一斉に戸外に飛び出した。私は、両側の校舎の間の空地に飛び出して、丁度、青桐の樹が植えてあって、それにつかまっていた。私の外にも相当数の生徒が周りにおったが、校舎が波のように揺れて、今にも倒れんばかりであった。その時始めて、これは大地震だなと刻々実感がわいて来た。ここで両側の校舎が倒れたら一コロだなと思ったが幸い倒壊しなくて済んだ。その代わり、東隣の民家が倒壊して、中に子供が

取り残されたが、幸い生命には、別状なかった。扨、この大災害のため、学校は、三日間の臨時休校となった。

引き続き余震の続く中を飛ぶようにして家に帰った。隣家が倒壊したのを見ているので、自分の家も潰れてはいないかと非常に心配だった。然し、幸い、外便所が潰れただけで、母家は、大丈夫だったが、土蔵の壁は、全部壊れ落ちて、仕舞った。

その後も、余震がたえずあるので、馬や牛は外につなぎ、その晩は、庭に蚊帳をつって寝たことを覚えている。

その夜、南の空が真赤になっているので、何か大きな火事が起こったなとはわかったが、それが東京だとわかったのは翌日になってからの事だった。

それと同時に、朝鮮人が襲撃して来ると云う流言が広まり、在郷軍人を中心として自警団が組織され、日本刀、剣銃、竹棒等で武装し、東京方面からの避難して来る者を検問したりした。後に、朝鮮人迫害虐殺事件として大問題になった。

この事件を通じて、如何に群集心理と云うものが恐ろしいものか、亦、如何に正しい情報を迅速に民衆に伝えることが重要かと云う事が反省される。

亦、災害については常に、対応を準備しておく事が必要だと云う事が痛感される。

これが私の関東大震災から得た教訓である。

関東大震災の教訓

上川崎　牧田　壮平

数え年十六才の秋であった。大正十二年九月一日は非常に暑い日で、私は昼食の支度をして居た時、時刻は十一時五十分頃かと思われる頃、非常に大きな地鳴りを聞いたと思うとすぐに地震であった。

すぐ火を消して、外に出て両親から聞いて「マンザイロク」の言葉をくりかえし、外に出た。両親は晩秋蚕に桑をやっていた。外から私は地震だと呼びかけた。ずいぶん長い地震であった。其の晩は裏の竹山に仮寝をしたのであったが、其の后、余震が多くて、時々大きな余震もあった。其の晩はねむれず、時々表に出て見ると、東南東の空が非常に赤く見えるので両親に話すと、事によると赤く見えるのは火事で空が赤く見えるのかも知れないと言われた。

九月三、四日頃かと思う頃、村社天神社に参拝に行った時、見ると石燈籠が両側共、中央上部からくずれて飛散していた。又、浄林寺の墓石もたおれて、檀家の人が出て立直しをすませてある家と、まだ直さない家が多くあった。

私の伯父が横浜に住んで居たので、手紙を出して返事を待って居た。その后十七、八日たつと受取人不明の付箋が付けられて、其のまま返って来たのである。

翌日、東武伊勢崎線を利用して浅草へ向かった、父は途中、工場又商店の焼あとがまだそのままであるのを左右に見ながら浅草について、東京へ行くと徒歩で横浜に向かった。一面に焼野原

に成ってしまい六、七日目に家に帰って来たのである。父は伯父の家の焼あとに立て札を立てて来たと言った。

九月三日頃、火災の火元は朝鮮人が火を付けたのだと言い伝って来たので、青年団は警戒に出た。私共は志多見村串作の堰に集って警戒に当たった。

過ぎし大正十二年九月の大震災の事を思い出すのもいやになる。

地震、雷、火事、親父という言葉もあるが、実にそうである。

早く地震予知、いわゆる地震発生数日前に判明をするのを、待っている次第であります。

私の思いで

砂山　奥野　要助

小学校五年生のある日の出来ごとであった。

丁度、昼食時なので準備の邪魔になる弟を乳母車に乗せて、祖父が前の方（カイド）を行くので、私もついて行った。中頃まで行ったときである。大きな地震がした。祖父が地べたにふせろと云ったのだが、私は何がなんだか解らず足が震えて立っている事が出来ずひとりでにふせっていた。乳母車に乗っている弟は車がゆれるので泣きわめいている。前の方をみるとAさんの納屋が、豆腐がゆれ動くように右に左へと大ゆれに動いて、今にも潰れるかと思われる状態でした。本当に大きな地震でした。しばらく動くことも出来ず数分間を過ごしたように思われた。

今までにない大地震だったと、逢う人々誰もが云った。

翌日の夕方、東南東の空があかね色に見えた。不思議に思った。

その中、誰云うとなく、東京が地震で火事になり燃えているのだ、「朝鮮人が火をつけてあるいているのだそうだ」と云う人が出てきた。

「デマ」がとんでいる。デマがデマを呼んで、益々拡大されつつある。群衆心理ほど恐ろしいことはない。朝鮮人がきたら、ぶち殺してしまえ、いやどこそこでは何人殺したそうだと、次から次へとエキサイトして行く。流言飛語である。

各村々にては、なかには、家伝来の日本刀などをもって、自警団を組織して、朝鮮人の逃れて

くるのを村はずれで、待ちぶせする状態であった。熊谷、本庄等中仙道筋では相当数の朝鮮の人がこの犠牲になったそうです。

おそらく火事は四、五日、いや一週間位燃えつづいたことでしょう。

今日では宇宙旅行に行き、確実に再び帰ってくることの出来る社会、又情報化時代といわれ、影も形も見えないのに通話が出来る現代社会だが、当時は、ラジオやテレビ等の普及もなく、只、人の口から口へと伝える方法しかなかった。止むを得なかったのだ。

最初の人は聞いた話だからと次の人に話し、次の人は更に輪をかけて〇〇だそうだと云い、更にその次の人に話すときは見て来たように確実性をもって伝える。誠に不可解なことである。

正当な話しならいざしらず、針少棒大に話がエキサイトされてしまう。これがデマである。本当にデマほど恐ろしいものはない。

この地震の被害は相当数の人命を失い、又、多大な資産を焼失し、損害額は、いまだかつてなかった大被害であった。世に大地震と云われ、例年九月一日を記念日として国民のいましめとしてあります。

再び申します。デマほど恐ろしいものはないと、小学生にときながら一生の思い出の一コマである。

私の思い出

下羽生　　蓮見　英一

大震災の当日、丁度、秋蚕の世話で、家の中で蚕に手入れ中でした。私は出（でい）の座敷で、父母は寝床の座敷で、家の中は一杯の蚕でした。熱心にやって居る時、ぐらぐらと地震が始まり、一斉に地震だ、外に出ろと云う声が出て、私は前の庭に、父母は裏庭へと、飛び出しました。何せ揺れが激しく、歩く事すら轉び倒れそうで、庭の真中迄漸く逃げ、庭の土に手を付いて身を支えて居るのが精一杯でした。

其のうち、父は裏を東に廻り、東便所と母屋の間を出て来ながら、大丈夫かと声を掛け乍ら出てきました。ふとそれに目をやると、今にも便所に轉がり倒れ掛かりそうに見え、心配した位でした。

上下左右に揺れた地震、今にも家が倒れそうな様子、私の家は当時、藁屋根でしたから大屋根は大丈夫でしたが、廂が瓦の為、前に瓦が傷み落ち、廂しが離れ掛かり、便所も斜めになり、今少しで倒れる処でした。長屋は前がトタンでしたので助かりました。

古い土藏等のある家は殆ど壁や瓦は落ち、崩れた家が大部分でした。私の家の裏の井戸も地表迄出て居た水でしたが、一尺位の井戸側を越して、廻り一面水だらけでした。

余震もかなり頻繁に感じるので、夜は西山の南側に竹藪の中で近所の人と過ごしました。

私は前の実業高校の二年生でしたので、学校では被災者が東京から避難して来る羽生駅にお茶

の接待する当番に出ました。
故郷に帰る人、皆、焼き出された人で、着のみ着のままで、煙の出る貨物の汽車の屋根上迄、はら這いで乗って来て、どうして乗り、落ちる心配も、ものともせず命掛で帰って来た事を思い出すと、今でもぞっとします。
一日の夜、東京の空は真赤でした。
東京には叔父一家が住んでおりました。父親の弟一家でしたが、其の安否が心配でした。東京では戒厳令がしかれ、流言飛語が飛びかい、特に鍼灸治療所をやって居り、何人かの弟子が居り、其の中に朝鮮人に似た顔をして居る方が居るので、避難の際、被害を受けてはと、随分心配した様でした。
このへんでも竹槍や刀を持出して騒ぎ、警察でも随分苦労して居る事が随所に聞かれました。家の叔父一家は幸い、貸家が一戸焼け残ったので、其こに移り由にて、危害なく済んだとの事でほっとしました。
尚一つ、私の子供心に残る事は、私の親類、羽生の松屋醤油屋の東京支店のことですが、これも震災に会い丸焼けでした。東京に行って調べたが消息が分からず心配していました。思い余って、或る信仰者に見て貰ったら、命は無事で五日の日には西の方から帰ってくると云う事であると話がありました。

当日、高崎線で熊谷を廻り、羽生駅に帰って来たとの事、尚、私の家にも泊まったりし、叔母様が縁側で針仕事等をして居た事も心に残って居ります。

其れから、地震と云うと特に敏感で良く飛び起きる習慣になりました。

家を建てかえた今日になって漸く落ち着いて居る事が出来るようになりましたが、大きな地震が今后こない様、心で願って居ります。

関東大震災と私

砂山　関口　啓助

私はあのとき小学校の三年生であった。学校で始業式があって、早く帰って来て、丁度、家中揃って昼食を食べていた。

みしみしっ、ぐらぐらっときた。「地震だっ。でかい地震だっ。裏の山へ逃げろっ。」

私は腰掛けて食べていたので、よろけながらも直ぐ逃げ出したが、父が弟を抱えて動けないでいたのを、今もはっきり覚えている。麦飯で、鍋に唐茄子の煮付けがあったのも不思議に印象に残っている。

裏には井戸があって、その傍らが竹山になっていて、疎の竹につかまっていたが、ただではとても立っておれない。地面が丁度、遊動円木のように揺れ動いて、この世がどうなるのか全く生きた空もなかった。

いくらか納まってきたかと思うと、またぶり返したように揺れて、仲々鎮まろうとしなかった。それでも漸くして鎮まってきてた。こわごわ周りを見ると、もうもうと埃っぽい中に建物はどうやら、どれも無事に立っていたのにはほっとした。

棚が落ちたり、壁に罅のいった所ができた程度であった。地割れもないかと竹山の周り、庭など見たが幸いそれもなかった。

揺れはその後も一定間隔を置いたように何回となくやってきたが、初めの程ではなく、大分落

ち着いて来た。が、まだどんな揺れがくるかと戦々兢々としておったが、あれほどの地震でも近所にも倒れた家はないようであった。

夕方になると、東の方の空が異様に明るい。どこか火事じゃないか。「火事だ、火事だ。」と近所の人が通りに出てくる。うちには志多見に親戚がある。行ってみなくてはと、親父が出掛けていったが、暫くして帰ってきて、「もっと先だ、菖蒲の方だろうということだった。」という。

暗くなるにつれて、東の一角は不気味に明るくなって、時々起こる余震におののきながら不安な夜があけた。外に蚊帳を吊って寝たように思う。

翌日になって、東京が火事だ、と次第に分かってきた。が、そのうちに、〇〇人が井戸に毒を入れて歩くという噂が広まってきた。自分にはどうしてそんな事をするのだろうと不思議にしか考えられなかった。

夕方になると親父が夜警にゆくのだと言って、松の枝に瘤の付いた、普断は肩叩きに使っているのを取り出してきて、手頃の武器とばかり、腰にさして出掛けていった。

東京が震災で焼け出されて、田舎の親戚に疎開してきた者が、自分のクラスにも慥か二人はいたと思う。

気の毒なことに思っていたが、極くおとなしくしていたし、期間も長くなかったので印象は薄かったが、書き方の時間にこんな事があった。時間が始まる前に皆が硯で墨をするのであるが、

疎開の子の一人が変わった硯を持っていて墨を磨る様子もない。普通の硯と同じ形はしているがブリキで出来ている。中は中空で、硯の海（うみ）のところに十円銅貨大の丸い穴があいている。その中に墨汁を注ぎこんでそれで準備は終わりである。筆先をその中に漬けて、陸（おか）で適当に穂先をととのえるのである。皆一生懸命、墨を磨っているのに磨る世話がない。習字の上手下手は忘れたが、子供心に東京は変わっているな、と思った。墨汁で習字をすることが珍しかったのである。

これは後に分かった事であるが、疎開の児童の中に誠に奇特な人がおったのであるが、これは地震の体験と違うので、項を改めて記したい。

兎に角、自分としては、この命振るい（命拾い）をした経験を無にしない為に、地震の時はこうしたいと決めている。また、広くお奨めもしたい。

一、火を消す。ガス、石油コンロ、焚火。

二、戸外に出るとき座布団なり、服の上衣なり、防空頭巾の代わりになるものを被って出る。

三、外に出るのが間に合わなかったら机なり、椅子なり、茶箪笥なり、高さのある物の傍に伏せる。昔から、行燈が梁を支えるという言葉がある。

四、地割れが出来るかも知れない。竹山又は木の根元で立木にでもつかまっている。

以上私の拙い記録である。